獣医はステキなことだらけ

島田　悠子

【あらすじ】

獣医学部三年生の夏凪渉（なつなぎわたる）（21）は東京の実家近くの「ファミリア動物病院」を訪ねた。夏休みの臨床実習は三年生の必修科目。行き先は自由。期間は七日間。彼は実家のペットのかかりつけを選んだ。「ファミリア」の院長先生は優しく、看護師たちはいつもニコニコ。夏凪は「ファミリア」でならステキな実習になるだろうと期待していた。

期待通りの前半。帝王切開で子犬たちが産まれたときは感動した。小さな小さな、まだ目も開かない子犬たちが力強く産声をあげた。院長が夏凪に聞いた。「卒業したら、ここで修業するか？」夏凪の答えはもちろん「はい！」。二人は笑顔で約束を交わす。

翌日からの後半戦。夏凪は「ファミリア」の実態を知ることになる。「ファミリア」の労働環境はひたすらブラックだった。獣医は月月火水木金金。深夜早朝、就寝中に緊急の要件が入るのも日常茶飯事。獣医はサービス業、人気商売なのだ。どんなに獰猛な犬に咬まれても、笑顔を忘れるべからず。「けっこう毛だらけ、猫ハイだらけ、獣医はステキなことだらけ」、院長のジョークは笑えない。夏凪は消耗する。

なぜ、獣医を志望したんだっけ。夏凪のモチベーションがゆらぐ。四年前、実家の猫が交通事故に遭った。あのとき、「ファミリア」の待合室で泣いていた夏凪に誰かが言った。「泣くな。助けたければ、獣医になれ」。あれは誰だった？　飼い猫が死んでペットロスになった夏凪に両親は子犬を与えた。あのときの子犬はいま三歳。まだ若いのに心臓病を患い、腹水がたまって死を待つだけ。

実習が終わりを迎えるころ、愛犬が発作を起こした。夏凪は急いで「ファミリア」に連れていったが、「いま助けても、また苦しんで死ぬ」と厳しい決断を迫られた。選べない。死を受け入れられない。そんな夏凪に誰かが寄り添い、言った。「もう、いいよ」と。「楽しかった。ありがとう」。その声の主は愛犬だった。現実かどうかわからない。でも、夏凪には確かに聞こえた。いつか聞いたあの声も、愛猫のものだったのかもしれない。夏凪は涙とともに愛犬の死を受け入れ、獣医になる決意を固くする。

【登場人物】

夏凪（なつなぎ）　渉（わたる）（17）／（21）高校二年生／獣医学部三年生

朝比奈（あさひな）　舜（しゅん）（36）勤務獣医師

金閣寺（きんかくじ）　正親（まさちか）（65）動物病院院長

金閣寺　鶴子（つるこ）（45）正親の妻・動物病院受付

リサ（30前後）動物看護師

ミク（30前後）動物看護師

マイ（30前後）動物看護師

ヒナ（30前後）動物看護師

夏凪　覚（さとる）（48）／（52）渉の父

夏凪　和花子（わかこ）（45）／（49）渉の母

夏凪　緑（みどり）（82）渉の祖母

オーナー1、2、3、4、5、6

子ども

ユキマル

○夏凪家・前

東京、住宅地の一戸建て。
暑い夏の日。重なるセミの鳴き声。逃げ水がアスファルトに揺れる。
そのむこうに、大きめのバッグを肩にかけて歩く夏凪渉（なつなぎわたる）（21）の姿。
玄関先のインターホンに「猛犬注意！」のシール。

○同・中・玄関

犬用のベッドで寝そべっている白い犬が顔をあげる。優しそうな顔立ち。

○同・前

玄関先で夏凪がインターホンを押そうとすると、わんわんと家の中から犬の鳴き声がする。
夏凪は苦笑いする。

夏凪「バレた……なんでわかるんだろうな」
犬の鳴き声に続いて、夏凪の母、和花子（わかこ）（49）の声。

和花子の声「はーい、はいはい！」
ドアが開き、和花子が顔を出す。

和花子「渉。待ってた。おかえりなさい」

夏凪「ただいま。お邪魔します」

○同・中・玄関

犬がベッドに寝そべったまましっぽをふっている。犬をなでる夏凪。

和花子「東京と神奈川なんだから、もっと、ちょくちょく帰ってきてもいいのよ？」

夏凪「そうもいかないよ。大学生はバイトで忙しいの」

和花子「勉強で、じゃないのが惜しいわね」

夏凪「すいません。働き者で」

和花子「夏休みなんだし、一週間なんていわないで、ずっと泊まってったら？」

夏凪「来週、シフト入れちゃったんだよ。ユ

キマル、聞いてたより元気そうじゃん」
和花子「今日はね。昨日、ファミリア先生で腹水、抜いてもらったの。でも、ダメね。一晩でおなかパンパンに戻っちゃう」
夏凪「そっか……ずいぶん痩せたね。肩とか腰は、骨が触れる」
和花子「そうめん、茹でてあるの。食べるでしょ？」
夏凪「えー。なんで、いつも作りおきなの。やだよ、のびたの。麺は茹でたてが基本でしょ？」
和花子「食べるか、食べないか！」
夏凪「……食べますけど」
和花子「面倒みられてるうちは半人前よ。文句は丸めてゴミ箱に捨てなさい」
夏凪「あとで散歩、行こうな、ユキマル」
犬の頭をくしゃりとなでて、リビングにむかう夏凪。和花子も。
和花子「渉が買ってくれた、あれ。キャンピングカート？　ユキマル、気に入ってるのよ。乗っけて引っぱるとよろこぶの。歩けなくても散歩は好きなのね」
夏凪「犬だからね」
和花子「ついでにママに高級マッサージチェア買ってくれない？」
夏凪「なんのついでだよ？」
二人を見送る白い犬。ベッドでしっぽをふっている。

○同・ダイニング

窓辺の水槽をのぞく父、覚（さとる）（52）、金魚にちびちびとエサをやる。
風鈴が涼し気に鳴る。庭には、いまは使われていない犬小屋がある。
そうめんをすする夏凪。
夏凪「ぶわっ！　って、これ、麦茶！」
和花子が笑う。
夏凪「ちょ、ふざけてないでさ！」

和花子「あー、たのし！」
夏凪「たのしくないよ！」
　　和花子はスイカを食べている。
和花子「それで？　臨床実習って、単位いくつなの？」
夏凪「六」
　　夏凪もスイカに手をのばす。
和花子「けっこう大きいのね」
夏凪「毎年全員オールAだってさ」
和花子「実習先が評価するんでしょ？」
夏凪「うん」
和花子「じゃあ、テキトーってことね。毎日、顔出して難なくこなせばAですよ、的な？」
夏凪「一応、Aプラスとか、A2プラスとか、あるらしいけど」
和花子「Aマイナスもある？」
夏凪「たぶん」
和花子「それでも評価はA。さすがに、よそさまの職場にお邪魔して単位落とす生徒はいなのね」
夏凪「それが……」
和花子「それが？」
夏凪「でたらしいんだよ、何年か前に」
和花子「急に怪談みたいになったけど」
夏凪「怪談より怖いって。再テストとかなしで六単位だよ？　落としたらヤバいって。留年しちゃうよ。獣医学科って、けっこうサバイバルなんだから。毎年何人かずつ消えてくんだよ。留年したり、辞めたりして。最初に十人いたはずの佐藤が、気づいたら四人になってたりするんだから！」
　　和花子、悲鳴をあげる、ふり。
和花子「それで、六単位落としたその子、実習先でなにしたの？」
夏凪「それが……謎なの。わかんないんだよ、そこまでは。あくまでウワサだし」
和花子「肝心なところがうやむやなあたり、現実味があるわ。本当に怖くなってきた」
夏凪「でしょ？」
和花子「院長先生のご機嫌次第ってことだと

思うけど……下手しないでよ、渉」
夏凪「わかってるよ。留年だけは絶対やだ。まわりがみんな後輩になるなんて、アウェイすぎる。そんな環境になったらテスト対策もへったくれもないじゃん。もう一生、三年生からあがれないよ。終わるね」
和花子「とかいって、途中で投げ出していい学費でもないしね？」
夏凪「……感謝してます」
和花子「ま。ファミリア先生なら知らないところでもないんだし、いつも通りの渉でね。無事故、無違反。それだけ注意して、がんばりなさい」
夏凪「うん。そうする」
会話にまじらず、水槽を見ている寡黙な父。
金魚がエサをぱくぱく。

○「ファミリア動物病院」・外観（朝）
幹線道路から一本入った街並みにある、清潔でスッキリとした建物。
病院の前に並べられた鉢には、よく手入れされた夏の花が咲いている。
自動ドアに「診察十時から」の札。
夏凪の声「今日から実習で一週間、お世話になります、夏凪渉です！」

○同・処置室（朝）
処置台を中心に輪になったスタッフ一同。夏凪が自己紹介をしている。
夏凪「東布（とうぶ）大学獣医学部獣医学科三年生です。よろしくお願いします！」
頭を下げる夏凪。
四人の動物看護師たちが色めき立つ。
リサ、ミク、マイ、ヒナ。みな三十前後で、髪型もメイクもおしゃれ。
リサ「大学生！　若ぁい！」
ミク「肌きれい！」
マイ「私のことはマイちゃん、って呼んで」

ヒナ「じゃあじゃあ、私はヒナちゃんね」
リサ「私はリサ」
ミク「ミクでーす」
夏凪「はい。よろしくお願いします……えっと」
　夏凪、誰が誰か覚えきれず。
夏凪「ミサ、さん？」
リサ「リサ！」・ミク「ミク！」
　朝比奈舜（あさひなしゅん）（36）、勤務獣医師。
朝比奈「敬称略。A、B、C、D、でいい」
　朝比奈はクール。ジョークなのか、本気なのか。
リサ「ちょっとぉ！」
ミク「ひどぉい！」
マイ「ないですよぉ！」
ヒナ「ちゃんと！」
朝比奈「名札がついてるんだから、名字でいいだろ。ただでさえ実習生はテンパるのに、いらない圧をかけるな」
　夏凪、必死でメモを取りながら、
夏凪「大丈夫です。覚えました。リサさん、ミクさん、マイさん、ヒナさん、です！」
リサ「わぁ！」
ミク「すごーい！」
マイ「さすが！」
ヒナ「頭いい！」
朝比奈「メモリと紙のムダ」
　ニコニコしている金閣寺正親（きんかくじまさちか）（65）、院長。そんな柄のネクタイ、どこで買ったんだ、という動物柄のネクタイに、白衣。
金閣寺「というわけで。今日から実習生が入ります。みなさん、よろしく。わからないこともあるだろうから、サポートしてあげてくださいね。東布大学ってことはボクの後輩にあたります。彼は将来有望な獣医師のたまごですよ」
夏凪「いえ。そんな。ボクは平均以下で……」

金閣寺の妻、鶴子（つるこ）（45）、受付。
鶴子「ご謙遜。お母さんは、いつもあなたの話をしてるのよ。自慢の息子だって」
夏凪「それはウソだと思います」
鶴子、笑う。
鶴子「親孝行はいいことよ」
金閣寺「懐かしいなぁ、夏休みの臨床実習。ボクもやりましたよ。沖縄の病院に行ったんです。夏に沖縄に行ってみたかったって、それだけの不純な動機なんですけどね。もう何年前ですかね。変わらないんですねぇ、大学のカリキュラム」
夏凪「三年生の必修科目です。実習先は自分で探す。期間は一週間」
金閣寺「五年生になったら牧場実習ですか？」
夏凪「はい。草原で牛の群れに小突き回されて追いかけられるっていう……」
金閣寺が笑う。
金閣寺「それは人によるかもしれない。ボクは追いかける方でしたよ。牧羊犬代わりにされて、牛をまとめるのにフルマラソンくらい走りました。どちらにせよ、実習ではケガのないようにしましょうね」
夏凪「はい。気をつけます！」
鶴子「そんなに緊張しないで、夏凪くん。うちにはむかしから通ってもらってるし、小さいときから知ってるんだから。リラックス、リラックス。実習、楽しんでね」
夏凪「はい。ありがとうございます！」
金閣寺「ではでは。朝のミーティングを終わります。診察をはじめましょうか。みなさん、今日もよろしくお願いします！」
ほか一同「よろしくお願いします！」
夏凪、緊張しつつも、期待に胸が膨らむ。

○同・診察室
診察台にプードルがのっている。それをリサが軽く支えている。

金閣寺が耳道を洗浄する。犬のオーナーは中年女性で、上機嫌におしゃべり。
夏凪は邪魔にならないよう、ドアのところにひかえて見学している。
オーナー1「だから、先生、うちもドライブレコーダーぐらい買おうかって言ったのに、うちの旦那は大丈夫、大丈夫って、そればっかりで、らちがあかないんですよ！」
金閣寺「そうですかぁ」
金閣寺は手際よくもう一方の耳を洗浄する。犬は特に気にしていない。
オーナー1「たまにしか乗んないんだから、いらないって言うんですよ。たまにしか乗んないんだから、運転だってそんなにうまくないでしょって言ったら、もう、ぶちギレ！　だから、むこうが謝るまでコンビニ弁当にしてやろうかと思って！」
金閣寺「それはそれは……うらやましい！」
オーナー1「え？」
金閣寺「いまコンビニ弁当って色々ありますし、おいしいでしょう？　プチ贅沢ですよ」
オーナー1が笑いだす。
オーナー1「確かに！　ビールがすすむ味ですよね。やだ、じゃあ、どうしよう。げんなりする夜ごはんを食べさせてやりたいんですけど、なにがあるかしら？」
金閣寺「うーん。なにかな？　夏凪くんは、どう思う？」
夏凪「え？　ボクですか？」
金閣寺「うん」
夏凪「んー……茹でて何時間もたって、のびきったそうめん。とか？」
オーナー1「それ、いい！」
夏凪「オマケに、めんつゆだと思ったら麦茶で……」
オーナー1、壁を叩いて笑う。
オーナー1「やだ、それ、最高すぎる！　そうするわ！　もう毎日、そうしてやる。この実習くん、おもしろいじゃない、院長！」

金閣寺「めんつゆと麦茶は危険コンビですよね……はい、いいですよ。先週よりかゆみも減ってるようですね。同じ点耳薬を出しますから、また一週間したらチェックしましょう。来週の今日あたり、ご都合いかがですか？」
オーナー1「来ます、来ます。毎日ヒマ！」
金閣寺、にこやかに犬とリードをオーナー1に渡す。
金閣寺「おうちでは綿棒で掃除しないでくださいね、耳の中を傷つけることがありますから。気になるときは来院してくださいね」
オーナー1「はぁい。やぁん、チョコちゃん、チョコちゃん、いい子でちたねぇ！」
金閣寺「お大事にどうぞ」
オーナー1「ありがとうございまちたぁ。またお願いちまちゅう」
オーナー1、犬の手を持ってふる。
リサ「お大事にどうぞ」
オーナー1が退室する。リサが診察台を拭き、金閣寺はカルテを記入。
金閣寺「夏凪くん」
夏凪「はい」
金閣寺「次、看護師役で入ってみる？」
夏凪「いいんですか？」
金閣寺「いいよ」
夏凪「はい！　お願いします！」
リサが夏凪と代わる。
リサ「そんなにギュッと押さえなくても、うちにくる子たちはいい子ばっかりだから。台から落ちないようにだけ注意してあげてね」
夏凪「はい」
ミクが次のカルテを金閣寺に渡す。
ミク「次は近藤ミーコちゃんちで、三日前に野良猫を保護したそうです。一般身体検査をご希望です。あと、オスメスがわかれば、とのことです」
金閣寺「はいはぁい。近藤さん、どうぞ」
次のオーナーが診察室に入ってくる。

若い女性と小学生くらいの子ども。
ダンボール箱を抱えている。
オーナー2「先生、お願いします」
金閣寺「こんにちは」
オーナー2「あれ。新人さんですか？」
夏凪「こ、こんにちは」
金閣寺「実習生の夏凪くんです。ボクの大学の後輩なんですよ。彼も一緒に、いいですか？」
オーナー2「もちろん、全然ＯＫです！」
金閣寺「それで、保護した猫というのは？」
オーナー2、診察台の上にダンボール箱を置く。
オーナー2「たぶん、ノミだと思うんですけど、なんかピョンピョンしてて、ミーコにうつりそうで……子どもにも、うつったらと思って」
ダンボール箱を開けると中には、
夏凪「う、わぁ……！」
かわいい子猫が数匹。
夏凪「かわいい！」
思わず表情がとろける夏凪。
金閣寺、子猫を一匹、取り出す。全身をチェックしながら。
金閣寺「これはかなり赤ちゃんですね。目は、青い。歯は生えてるかな？　ノミダニ駆除のたらす薬が使えるのは生後六週間たってからなんです。この感じだと、まだそこまでいってなさそうですねぇ。今日はスプレータイプを使いましょうか。とりあえず、ノミがいるかどうかを……」
金閣寺、夏凪に子猫を渡す。
金閣寺「ちょっと持っててくださいね」
夏凪「はい！」
あまりにかわいい子猫。ミー、ミー、と夏凪の手の中で一生懸命、鳴いている。
夏凪、うっとり。
金閣寺、ドアのところでひかえているミクに、

金閣寺「あれ、持ってきてくれる？　あの……あれ。単語が出てこない、やだな」
ミク「ノミ取りコーム、ですか？」
　ミク、金閣寺にそれを渡す。
金閣寺「そう、これこれ、正解！」
　母親の後ろから子どもが顔を出す。
子ども「ナイスアシスト、アニマルヘルステクニシャン。ここのお姉さんたちは、いつも先生たちの一歩先を読んでる」
夏凪「……さすがです！」

○同・検査室
　マイが手招きする。
マイ「夏凪くん、夏凪くん。血液検査、してみる？」
夏凪「はい！」
　マイに血球計算機の操作を教わる夏凪。注射器から血液をチューブにうつし、遠心分離、検査チップをセットし、スタートボタンを押すと、自動。
マイ「血球の種類とか、血中の成分のなにがどうかってことは、きっと大学で勉強してるよね。じゃあ、大学では教えてくれないこと。この血球計算機、いくらだと思う？」
夏凪「え？　値段ですか？　んー……全然わからない」
マイ「直感で。いくらなら買う？」
夏凪「三十万……とか？　ですか？」
マイ「二百万でしたぁ」
夏凪「たか！」
マイ「からの、ハッピープライス！　院長の知り合いで動物病院を廃業した先生から譲り受けて、まさかの……」
夏凪「まさかの？」
マイ「ゼロ円でしたぁ」
夏凪「ハッピープライスすぎますよ！」
マイ「お礼に牛タン十キロ、送ったそうです」
夏凪「ツッコミどころ満載すぎて……」
　マイが笑う。
マイ「操作は覚えた？」

夏凪「はい。たぶん。覚えました」
マイ「さすが、獣医学部。夏凪くんは即戦力ね！」
夏凪「いや、そんな……」
照れる。

○同・入院室
ヒナが手招きする。
ヒナ「夏凪くん、夏凪くん、入院の子のお散歩する？」
夏凪「はい！」
夏凪が行くと、ヒナが中型犬に二本、リードをつけている。
ヒナ「うちでは、お散歩中に、はなれてしまうと大変だから、こうして首輪とリードを二つずつ、ダブルリードにします。トイレを、うんちとおしっこと両方すませてきます。この子はうんちをする前にその場でくるくる回るからわかりやすいの。はい、これ。お散歩セット」
夏凪、ヒナから手さげとリードを渡される。
ヒナ「夏凪くんちにはユキマルちゃんがいるから、犬のお散歩には慣れてるよね。その前は猫ちゃんも飼ってたんだよね？」
夏凪「はい」
ヒナ「夏凪くんは犬も猫もいけるんだね。頼もしい。さすが、獣医学部！」
夏凪「いやぁ、そんなでも……」
照れる。

○公園・遊歩道
夕暮れ前の並木道。大合唱のセミの声。何匹もの犬を散歩させている夏凪とヒナ。日陰の遊歩道を歩く。
夏凪、犬たちに引っぱられて走る。
夏凪「うわわわわ」
ヒナが笑う。

○同・入院室・水回り

入院の犬猫のフードを作る夏凪。それぞれにフードの種類と量があり、紙を見ながら確認して作業する。フードに混ぜる薬もそれぞれにあったりなかったり。

夏凪「えっと……ａｄ二つと、尿ケアと、繊維食と、除去食、ホテル、ホテル、ホテルで、1、2、3、4、5、6、7、8、薬もいれたと。よし！」

夏凪、フードの入った食器を入院ケージに配る。

犬猫たちの食事の時間。

夏凪、幸せそうにそれを眺める。

夏凪「みんな、おいしそうに食べるなぁ……なんかオレも、はら減ってきた」

おなかをさする夏凪。

カラン、と音がして、見ると、カラっぽの食器を犬が踏んでいる。

夏凪「もう、食べた？　まだまだ食い足りないって顔だけど、また明日な。薬もちゃんと食べてある。よしよし」

犬をなでて、食器を回収する。それを流しで洗って、ひと息つく。

夏凪「あとやることは……と。その前にひと休みしてるヒマあるかな？」

時計を見る。

時刻は六時すぎ。

夏凪「え。ウソ。もう六時？　時間たつの、はや！　一日が一瞬じゃん。今日、オレ、トイレ行ったっけ？」

ふと、視線を感じてふりむくと、朝比奈がドアのところにいて、見ている。

夏凪「あ。朝比奈先生」

朝比奈「独り言、えげつな！」

夏凪「う」

朝比奈「実習生。外の花に水、やって」

夏凪「あ、はい」

朝比奈「一個一個、鉢底から水が出るまで、たっぷりな」

夏凪「わかりました」

去ろうとする朝比奈。
夏凪「あ、あの！」
朝比奈「なに」
夏凪「あの……院内の掃除と、水やり、どっちが先ですか？」
朝比奈「は？」
夏凪「優先順位的に。あと、入院の子、何頭かにレーザー治療あてるのと、洗濯機回して干すのと、院内の窓とかガラスを拭くのと、ゴミを分別してまとめるのと、待合室のソファをきれいにするのと、書き終わったカルテを棚に戻すのと、病院の外の掃除と、駐車場にゴミがあったら拾って……」
朝比奈「それ全部、お前がやるのか？」
夏凪「看護師さんたちに任せられちゃって」
朝比奈「バカ。うれしそうにするな。それは任せられたんじゃない。雑用を押しつけられただけだ。使えるか使えないか、値踏みされてたのに気づかなかったか？」
夏凪「え？」
朝比奈「仕事を断ることも覚えろ」
夏凪「でも……」
夏凪「評価に響くとマズいとか思ってるのか？」
夏凪「あ、いや、その……はい。少し」
朝比奈「評価どうこうの問題じゃない。はりきるのはいいが、できないぶんまでイエスと言うな。あとでトラブルになる」
夏凪「……はい」
朝比奈「実際、ホテルのエサを間違えてる」
夏凪「え！　やば！　確認したのに！」
朝比奈、ケージを開けて、ホテルの犬と猫のエサを取り出す。
朝比奈「犬のエサと猫のエサが逆だ」
夏凪「すいません！　すぐ、やり直します！」
朝比奈「やらなくていい。どっちも、もう食べ終わってる」
夏凪「あぁ……どうしよう！」
朝比奈「どうもしない。この程度のミスなら問題はない。ホテルの犬猫は基本的に健康

だ。一回ぐらい、食事がいつもと違ったところで体調を崩したりはしない。が！」
夏凪「朝比奈先生、このこと、院長先生には……どうか！」
朝比奈「他人のミスをいちいち報告するほどオレはヒマじゃない」
夏凪「ありがとうございます！」
朝比奈「お前は花に水をやればいい。他のことは看護師がやる。花の世話はオレしかしないから、お前が確実にやれ。実習生」
夏凪「わかりました！　表の花って、朝比奈先生の花だったんですね。なんか、ちょっと……意外でした。いつも、きれいに咲いてて、すごいなって思ってたんです。朝比奈先生は動物も植物も好きなんですね」
朝比奈「別に。特別な理由はない。そこで生きてるから生かしてるだけ。じゃあ、オレはこれからオペに入る」
夏凪「オペ？　オペって……？」
朝比奈「その目はやめろ」
夏凪「え？」
朝比奈「キラキラするな」
　夏凪、瞬きする。
朝比奈「見たいなら見ててもいい。ただし、ボケっと立ってるくらいなら手伝えよ」
　朝比奈が去り、取り残される夏凪。
夏凪「……え。手伝うって。オレが？　手術を？　ムリムリムリ！」

○同・外（夕）
　外の花たちが濡れている。
　花びらについた雫が落ちる。
　中層のビルと電線に切り取られた空は夕暮れ。
夏凪の声「帝王切開、ですか？」

○同・手術室～処置室（夜）
　手術室で手術をしている朝比奈。助手に入っているリサ。二人は青いガウン姿。

あわただしく動き回っている他の看護師たち。
朝比奈「ブリーダーから連絡があった。破水から時間がたっても一頭目が出てこない。母犬が弱ってきてるっていうから、開腹するなら急げと言った。それでも、こんなに時間がたった……癒着がすごいな。レントゲン、出たか？」
マイ「もう出ます！」
マイが壁のディスプレイにレントゲン画像を出す。
朝比奈「1、2、3……八頭か。出すぞ！」
朝比奈が子宮を切り、子犬を取り出す。へその緒を糸で結紮し、胎盤を外して看護師たちに渡す。
次々に一匹ずつ、ミク、マイ、ヒナが子犬を受け取る。タオルにくるまれる生まれたばかりの子犬たち。
夏凪は、その光景にくぎづけ。
立ち尽くしている夏凪に気づく朝比奈。
朝比奈「実習生！」
夏凪「は、はい！」
朝比奈「血がダメとかいうなよ」
夏凪「大丈夫です！」
朝比奈「お前もタオル持ってこい！」
夏凪「はい！」
ミク「夏凪くん、そこにあるの、使って」
ミクが夏凪にタオルの場所を示す。
タオルは手術室の隣の処置室に、処置台の上にまとめて準備されている。
夏凪「ありがとうございます！」
朝比奈「来い、実習生！」
夏凪「はい！」
夏凪が朝比奈のそばに行くと、子犬を一頭、渡される。
朝比奈「看護師にやり方を聞け。落とすなよ！」
夏凪「は、はい！」
ヒナ「夏凪くん、こっちに来て」

夏凪、ヒナのところに行く。
看護師たちが処置台を囲み、トリミングドライヤーで子犬を温めながら小さな体をタオルでこすっている。
ヒナ「こうして子犬を目覚めさせるの。母犬から流れてきた麻酔でまだ眠ってるから」
ミクが持っている子犬が鳴き声をあげはじめる。
ミク「この子はもう大丈夫」
タオルを敷いたかごに子犬を入れるミク。
ヒナ「ほら、夏凪くんも！」
夏凪「は、はい！」
夏凪、渡された子犬をタオルでこすってやるが、なかなか鳴きださない。
マイ「どう？」
夏凪「まだ……」
子犬は鳴かない。くたっとしている。
夏凪「どうしよう……！」
マイ「よく、さすってやって」
夏凪、タオルでこする。
マイ「起きて、起きて、起きて」
夏凪「あ……いま、口を開けた気が」
マイ「ほんと？」
夏凪「わかりません。でも、たぶん……」
マイ「その調子で、がんばって！　私は次の子をもらってくるから」
夏凪「え、あ、ちょ！」
マイは手術室に行って、朝比奈から次の子犬をもらっている。
夏凪、子犬をタオルでこする。
夏凪「……鳴け、鳴け、頼む……起きろ！　がんばれ！　がんばれ！」
やがて。
ぴい、という小さい声が。
夏凪、ハッとする。
夏凪の手の中で、子犬が鳴きだす。
ぴい、ぴい。
確かに鳴いている。
夏凪「……！」

ヒナ「夏凪くん、次の子をもらってきて」
　そのまま、動かない夏凪。
ヒナ「夏凪くん？」
夏凪「……あ、はい！」
　夏凪、鳴きだした子犬をかごに入れる。かごの中で、まだ目も開かない小さな子犬たちが力強く産声をあげている。動き回って、母犬の乳を探している。
　夏凪、感動している。
朝比奈「役に立ってるか、実習生！」
　夏凪、涙ぐんだ目元をふいて、朝比奈のところへ行く。
朝比奈「これが最後のチビだ。起こせ！」
　夏凪、子犬を渡される。
　大事に受け取る。
夏凪「はい！」

○同・外（夜）
　帝王切開のオーナーが大きなケージを車に乗せて、何度もお辞儀をしながら、車に乗り込む。
　去っていく車を見送る朝比奈と夏凪。
朝比奈「さてと」
　朝比奈、植物の土を触る。
朝比奈「水、やったな」
夏凪「はい。底から出るまで、たっぷりと」
朝比奈「おつかれ」
　院内に戻る朝比奈。ガラス越しに見える。朝比奈が壁のスイッチを切ると、「ファミリア動物病院」の看板の明かりが消える。
　それを見上げる夏凪。
夏凪「初日、終了……！」

○夏凪家・外観（夜）
　明かりがついている。
夏凪の声「はぁー……」

○同・浴室（夜）

風呂に浸かっている夏凪。
髪も洗ってサッパリしている。
和花子の声「渉？　お風呂、あんたで終わりだから、洗ってきてくれる？」
夏凪「うん」
和花子「疲れてるとこ、悪いわね」
夏凪「いいよ」
和花子が去った気配。
夏凪、浴槽から出ると、身を乗り出して、脱衣所にある浴室用のスポンジと洗剤を手に取る。
浴槽の栓を抜いて、お湯を流す。
夏凪、裸のまま、スポンジに洗剤をつけて浴室を洗う。
ぐんぐん洗う。
ぐんぐん。
夏凪「……疲れてない。全然。たのしかった。実習先、ファミリアにして、よかったぁ！」
夏凪、シャワーで鏡の泡を流す。

○同・玄関・中（夜）
犬用ベッドで眠っている白い犬。

○同・リビング（夜）
壁掛け時計が示す時刻は、深夜。
風呂上がりの夏凪、扇風機にあたりながら、夜食のラーメンを食べる。
和花子、老眼鏡をかけて、片手にレシートの束。パソコンで家計簿をつけている。
夏凪「そういえば、父さんは？　オレ、帰ってきてから、まだ、まともに話してない気がする」
和花子「やつはビール三本で寝落ち。それより、どうだった？　ファミリア動物病院」
夏凪「うん。すごかった」
和花子「初日から、だいぶ遅くまでがんばったみたいだけど」
夏凪「手術した犬の麻酔がさめるの、待ってたから。院長には、先に帰ってもいいって

言われたんだけど、一応」
和花子「ちょっとした誠意を見せといた？　こりゃ、評価Aプラスかな？」
夏凪「そういうんじゃなくて。なんていうか……帝王切開で生まれた子犬が、母犬と一緒に家に帰るとこ、見届けたかったから」
和花子、メガネをずらして夏凪を見る。
夏凪は扇風機の風にあたっている。
和花子「ふぅん」
夏凪「帰りに、院長に言われたんだけど……」

○（回想）「ファミリア動物病院」・前（夜）
夜でも満開の夏の花たち。
自転車にまたがり、帰ろうとしていた夏凪がふりむく。
夏凪「……え？」
金閣寺は高級車の運転席のドアを開けて、もたれかかっている。なんとも、クセのあるオプションがついた車。
金閣寺「夏凪くん。卒業したら、ここで修業してみませんか？」
夏凪「それって……あの。すいません、違ったらあれなんですけど、つまり……就職、ですか？」
金閣寺「今日のキミを見ていたら、採用してもいいかなって、思ったんですよ」
夏凪「でも、まだ初日ですよ？　ボクはただ、ついていくのに必死で、今日は……」
金閣寺「一日あれば、人柄を知るには十分です。獣医師に必要なのは人間性なんですよ」
夏凪「いいんですか？　その、ボクなんかで」
金閣寺「自分のあとに、なんか、なんて、つけちゃいけません。いまのキミを作ったのはキミが出会ったすべての人たちなんだから。まわりに感謝して、自分を大切にしないとね。キミは素直で優しい。キミなら獣医として大成すると、ボクは直感したんですよ。夏凪くんが望むなら、いつか、こ

の病院を任せてもいい、かもしれない」
夏凪「マジで……あの、それ、本気で言ってますか？　院長先生？」
金閣寺「もちろん、キミの人生に関することですから、返事はゆっくり、一週間の実習を通して、ファミリア動物病院を体験して、それから考えれば……」
　夏凪、勢いよく頭を下げる。
夏凪「よろしくお願いします！　フツツカ者ですが！　一生懸命、がんばります！」
金閣寺「もう、決めたんですか？」
夏凪「はい！　もちろんです！　断るわけないです！　ぜひぜひ、院長先生のもとで勉強させてください！　ボクも院長先生や朝比奈先生みたいに、愛される、凄腕の、獣医師になりたいです！」
　金閣寺、笑う。
金閣寺「なら、約束しましょう」
夏凪「はい！」
金閣寺「今夜、この瞬間から、キミはボクの後継者です！」
　夏凪、感無量で言葉もない。
金閣寺「おつかれさま」
夏凪「おつかれさまでした！」
　金閣寺が車に乗り込み、出ていく。
　それを見送る夏凪。
夏凪「……これって、夢じゃ、ないよな？」

○もとの夏凪家・リビング（夜）
　扇風機にあたってラーメンを食べている夏凪。その手が止まっている。
夏凪「ファミリア動物病院、跡継ぎ、いないんだって。朝比奈先生も、いつかは独立するみたいだし」
和花子「おいしい話だと思った？」
夏凪「ち、違うよ！　そういうんじゃなくて、オレは、ただ……うれしくて……」
和花子「院長も口がすべったわね」
夏凪「あんなに、誰かに期待されたこと、いままでなかったから」

和花子「ウソん。感じない？　ママの期待を、ひしひしと！」
夏凪「あんま、感じない」
和花子「ガビーン。とほほ」
夏凪「リアクション、ふる！　ってか、一周まわって斬新かよ！」
和花子「ま。ムリのない範囲で、がんばってみなさい。後継者っていったって、口約束でしょ？　契約書に印鑑、押したわけじゃないんだから、いつでも白紙に戻せるわよ」
夏凪「そうだけどさ……」
和花子「じゃあ、ママはもう寝ます。明日も早いんでしょ。渉もさっさと寝なさいね」
夏凪「オトナの意見をありがとう」
和花子「礼には及ばぬ。おやすみなさい」
夏凪「おやすみ」
　和花子、去る。リビングの明かりを完全に消していく。
夏凪「ちょ！　くら！　なにが、どこ！　うわ！」
　和花子、たまらず、笑っている。いたずら好きな母。

○同・夏凪の部屋（早朝）
　ベッドで寝ている夏凪。スマートフォンを枕元においている。
　スマートフォンが鳴りだし、夏凪が寝返りを打つ。
夏凪「ううん……うん？」
　スマートフォンを取る夏凪。眠気に顔をしかめて画面を見る。
　着信「ファミリア動物病院」の表示。
夏凪「んあ！　うわ！」
　あわてて飛び起き、電話に出る。
夏凪「はい、もしもし、夏凪です！」
朝比奈の声「朝比奈だけど」
夏凪「あ、朝比奈先生！　おはようございます！　え、あの……！」
　夏凪、壁の時計を見る。
　時刻は早朝、四時。

夏凪「え」
朝比奈の声「出てこれる？」
夏凪「いま、ですか？」
夏凪、カーテンをめくって外を見る。
窓の外は、まだ暗い。少しだけ白んでいる東の空。
朝比奈の声「ダッシュで来い」
夏凪「え。あの」
通話終了。切られる。
夏凪「ウソ、でしょ……夜明け前なんですけど！」

○「ファミリア動物病院」・外観（早朝）
東の空は、すばらしい朝焼け。
自転車を立ちこぎで到着する夏凪。
息を切らし、汗だくで。
夏凪「……おは、よう、ございます！　朝比奈先生！」
しゃがんで花の手入れをしている朝比奈、ふりむく。
朝比奈「遅い」
夏凪「すいません！　あの、こんな早くに、どうしたんですか？　なにか、緊急事態ですか！」
朝比奈「花の世話をする」
夏凪「え？」
朝比奈「開院前に、昨日までに咲き終わった花がらを取り除いておく。つぼみをつむなよ」
夏凪「は……い？　開院って十時ですよね。まだ五時にもなってないんですよ？　なんで、こんな早朝に……？」
朝比奈「日が昇ったら暑くなる。外の作業はできなくなる」
夏凪、あ然。
朝比奈「鶴子さんから聞いた」
夏凪「鶴子さん……」
朝比奈「受付」
夏凪「あ、はい。院長先生の奥さんですよね？」
朝比奈「お前、ここを継ぐんだって？」

夏凪「え？　あ、いや、その……はい。たぶん……そのつもり、なのかな？」
朝比奈「昨日は院長にべったりはりついてたな。今日からはオレについてもらう。院長からお前を任された」
夏凪「はい」
朝比奈「朝の仕事は夜明け前にはじまる」
夏凪「はい。え？　ちょ、ちょっと待ってください。こんな時間にはじまったら、昼には勤務時間、終わっちゃいますよ。今日は午後の実習はないんですか？」
朝比奈「仕事が終わるのは夜。十時か、十一時か」
夏凪「ん？」
朝比奈「もう日が出た。時間がない。花がらつみ、しながら聞け」
夏凪「あ、はい」
　夏凪、朝比奈の隣にしゃがんで、花の手入れを見よう見まねでする。
朝比奈「たのしかったか？　昨日は」
夏凪「はい！　すごく！」
朝比奈「院長にかわいがられて、看護師はみんな優しくて、動物はかわいくて、院内はつねに和やかムード。獣医ってステキな職業だなぁ、とか思ったか？」
夏凪「はい。それが、なにか……？」
朝比奈「ダウト」
夏凪「え？」
朝比奈「それは外づらだ。ダマされたな」
　夏凪の手が止まる。
朝比奈「院長と約束したってな。後継者になるって。口約束でも、院長は実行するぞ。途中で『やっぱり、やめた』は通用しない。二百万の血球計算機も、酒の席の口約束で強奪した男だ。業者も入れた麻雀で廃業した同期をカモにしたらしい。むこうの先生は酒で記憶がとんでたらしいが、そんなことは院長にとってはクソくらえだ」
夏凪「え」
朝比奈「今日から、お前はファミリアの現実

を知る。自分が就職を決めた動物病院がどれだけブラックか、自分の目で確かめろ」
夏凪「ブラック？」
朝比奈「信じられないか？」
夏凪「はい」
朝比奈「手を動かせ」
夏凪「あ、すいません」
朝比奈「謝らなくていい。実習生がいちいち謝ってたらキリがない」
夏凪「はい……すいません」
朝比奈「すぐにわかる」

× × ×

きれいに手入れが終わった花たち。
汗をぬぐう夏凪と、朝比奈。
夏凪「あぁ……やっと終わりましたね。花の世話って、思ったより重労働なんですね。足がしびれて……でも、まだ七時前ですよ」
朝比奈「シャワーを浴びる」
夏凪「シャワー、あるんですか！　あぁ、ボクも借りたいです！」
朝比奈「バカ。動物病院に人間用のシャワーがあるか。近所の銭湯に行く。六時から開いてるからな。早起きのヒマなジジイに混ざって朝風呂だ。こっちはのんびりしてるヒマはないぞ。一五分で戻る。正味五分だ」
夏凪「え」
朝比奈「行くなら、さっさと来い。実習生！」
夏凪「は、はい！」
小走りに朝比奈についていく夏凪。

○銭湯・男湯・浴場（朝）
湯船につかっている数名のご老人。
ゆったり、まったり、している。
夏凪と朝比奈は並んでシャンプーしている。動作は素早い。
夏凪「朝風呂、気持ちいいですね！」
朝比奈「一日に八時間、働くとして。人間は月にどのくらい残業すると過労死レベル

に達すると思う？」
夏凪「ん？　んー……えーと。日に二時間、残業したとして、一週間に」
朝比奈「八十時間を超えたら突然死のリスクがあるといわれている」
夏凪「八十時間、ですか……想像がつかないな」
朝比奈「オレの場合、単純計算で月三百時間を超えてる」
夏凪「死んじゃうじゃないですか！」
朝比奈「普通なら、とっくに死んでる。オレが知る限り、ファミリアに就職した獣医たちは、のきなみ一か月もたずに辞めてる。みんな、最後は亡霊みたいな顔して、無断欠勤になって、フェイドアウト。外聞があるからな、院長は表むき、連中のことは短期の研修医って扱いにしてるが」
シャワーで髪を洗い流す朝比奈。
夏凪、言葉を失っている。
朝比奈「それだけ働いたら、月給えぐいと思うだろ？」
ハッとする夏凪。
夏凪「確かに！　ですね！」
朝比奈「残業代は出ない」
夏凪「あぁー……」
朝比奈「院長の辞書に、『労働基準法』という文字はない。どうした？」
夏凪「シャンプーが目にしみて……」

○同・脱衣所（朝）
びん牛乳を飲むご老人。
鏡の前で髪型をセットする朝比奈。
夏凪はタオルで拭くだけ。
夏凪「そんなに早朝から深夜まで働いてて、朝比奈先生は、いつ家に帰ってるんですか？　帰っても寝るだけですよね？」
朝比奈「病院のスタッフルームにオレの寝袋がおいてある。オペ室で寝れば、一番清潔な部屋だしな、快適だ」
夏凪「帰るのは休みの日だけですか？」

朝比奈「休みはない」
夏凪「え？」
朝比奈「有休もない」
夏凪「え、あの。休みがないって、どういうことですか？」
朝比奈「朝でも、夜でも、休日でも。どうせ、緊急で呼び出される。だから、はじめから病院にスタンバイしてる。もう、どれだけマンションに戻ってないか、覚えてない。冷蔵庫ごと腐ってるんじゃないか？」
夏凪、言葉がでない。
朝比奈のスマートフォンが鳴る。
朝比奈「ほらな。病院からだ」
電話に出る朝比奈。
朝比奈「はい……はい。すぐ戻ります」
夏凪「緊急ですか？」
朝比奈「あぁ。どうして病院にいないんだって、鶴子さんがキレてる」
夏凪「……うわぁ。理不尽」
朝比奈「理不尽、か」
朝比奈、ふっと笑って、スマートフォンをしまう。
朝比奈「お前も一か月で消えるタイプだな」

○「ファミリア動物病院」・外（朝）
駐車場にオーナーの車が停まっている。
オーナー3の声「先生、お願いします！」

○同・診察室（朝）
診察室に入る朝比奈。朝比奈にカルテを渡して、ひとにらみする鶴子。
朝比奈「大変、お待たせしました」
診察室の朝比奈は別人かと思うほど、にこやか、爽やか。
オーナー3がチワワを抱いている。
神経質そうな中年女性。
朝比奈「緊急で、時間外のご来院ということですが」
ドアのところにひかえる夏凪。

鶴子「夏凪くん、来てたのね」
夏凪「はい。朝比奈先生に呼び出されて」
鶴子「朝早いのは感心だわ。やる気満々って感じ。今日もがんばってね」
夏凪「がんばります……」
朝比奈「見たところ、特に緊急性はないようにも感じますが、どうされましたか？」
オーナー3「先生！　昨日、テレビで見たんです。狂犬病って、怖い病気なんですね！　かかると死ぬって！」
朝比奈「そうですね。人畜共通感染症といって、人にも犬にも感染するウイルスが起こす病気です。発症すると九九パーセントが死亡するとされています。世界では珍しくない病気ですが、いまのところ日本にはありません。それでも、公衆衛生上、予防の観点から、すべての犬の飼い主には、飼い犬に予防接種を受けさせる義務があります。チロちゃんは……」
　朝比奈、カルテを見る。
朝比奈「今年はまだですね」
オーナー3「そうなんです！　狂犬病の予防接種をお願いします！　あの番組を見てから、もう怖くて眠れなくて！」
夏凪「予防接種？　って、全然、緊急じゃないじゃん」
朝比奈「夏凪くん、補助に入ってもらえる？」
夏凪「あ、はい」
朝比奈「実習生です」
オーナー3「実習生？　実習生なんかにうちのチロちゃんを触らせて平気ですか？」
　夏凪、ムッとする。
朝比奈「もちろん、大丈夫ですよ。彼は院長と同じ大学の三年生なんです。いまは学生といっても、数年後にはボクや院長と同じ獣医師の立場です。優秀な学生ですよ」
オーナー3「そうですかぁ？　だったら、いいですけど？」
朝比奈「注射を用意してきます。夏凪くん、アルメン作ってもらえる？」

夏凪「はい。あの、アルコール綿なら……」
朝比奈、夏凪を引っぱって診察室を出る。
夏凪「朝比奈先生？」
ドアのところで。
鶴子がトレーに乗せた注射とアルコール綿を持ってくる。
鶴子「先生、どうぞ」
朝比奈「どうも」
トレーを受け取る朝比奈、夏凪に耳打ちする。
朝比奈「あのチワワ、マジ咬みするから。オーナーが診察台に乗せたら、ガッと、首のとこ、押さえろ。すぐ」
夏凪「は、はい」
診察室に戻る朝比奈と夏凪。
朝比奈「チロちゃんを診察台にお願いします」
オーナー3「チロちゃん、ちっくんよぉ」
犬を診察台に乗せるオーナー3。
夏凪、すかさず犬を保定する。と同時に、ガルガルと怒りだす犬。
夏凪、緊張する。
朝比奈、一瞬で犬のおしりに注射を打つ。
朝比奈「はい。打ちました。抱っこしてあげてください」
オーナー3「チロちゃん、チロちゃん、おいで！」
夏凪から犬を奪うようにするオーナー3。夏凪、ムカッとする。
朝比奈「接種証明を用意しますので、待合室でお待ちください」
オーナー3「よかった！　これで安心できます。ありがとうございました！」
朝比奈「お大事に」
診察室から出ていくオーナー3。
夏凪「あれって、実習生差別じゃないですか？」
朝比奈「院長じゃないとダメ差別もある」
夏凪「だいたい、狂犬病の予防接種って、春

に打ちますよね。何か月も遅れた予防接種を、時間外料金、払ってまで大急ぎで打つって……意味わかんないんですけど」
朝比奈「獣医はサービス業。人気商売だ。どんな要望にも笑顔で対応しろ。診察中に二度ムッとしたな？」
夏凪「……バレました？」
朝比奈「顔に出すな。ガッツリ犬に咬まれても笑ってろ」
夏凪「……はい。朝比奈先生、銭湯で思ったんですけど、腕の古傷、すごいですよね。右も、左も」
朝比奈「犬も猫も咬むからな。獣医が相手にするのは基本的に信頼関係ゼロの獣だ」
夏凪「オレも経験を積んだら積んだだけ、腕に傷が増えるのかな……ちょっと、かっこいいなって」
朝比奈「バカ。やめとけ。自慢にもならない。動物の気持ちがわからないから咬まれるんだ。傷の数は失態の数だと思え」
夏凪、ハッとする。
夏凪「……はい」

○同・処置室（朝）
時刻は八時前。
看護師たちが出勤する。リサ、ミク、マイ、ヒナ。みな、急いでいる。
鶴子「遅いぞ、コラ！　そろいもそろって、なにしてんだ！　リサ、ミク、マイ、ヒナ！」
リサ・ミク・マイ・ヒナ「はい！」
鶴子「やる気あんのか！」
リサ・ミク・マイ・ヒナ「あります！」
鶴子、人が違ったように怒声をあげる。口々に「すいません、すいません」と謝る看護師たち。
夏凪「って、まだ八時前ですよ。集合九時じゃ……？」
朝比奈「気にすんな」
鶴子「ミク、化粧が薄い！　手抜きか！　そんな顔で結婚相手が見つかると思ってん

のか！　やり直し！」
ミク「はい！　すみません！」
鶴子「ヒナ！　髪が崩れてる！　ブスは髪型だけはきれいにしてろ！　やり直し！」
ヒナ「すみません！」
　あ然とする夏凪。
朝比奈「実習生」
夏凪「あ。え？」
朝比奈「朝の入院チェックをする」
夏凪「はい」
　朝比奈についていく夏凪。

○同・入院室（朝）
　入院室のケージに入っている犬猫たち。
　前肢骨折の犬の診察をする朝比奈。
　夏凪は犬を抱っこしている。
夏凪「鶴子さん、あれって、セクハラに、パワハラじゃないですか？」
朝比奈「今朝のはマシな方」
夏凪「あれで、ですか？」
朝比奈「看護師が泣きだすと、さらにキレるからな。フードストック、あるだろ？」
夏凪「受付の後ろの小さい部屋ですよね」
朝比奈「看護師が泣くと、赤くなった目がもとに戻るまで、あそこに閉じ込められる」
夏凪「マジですか！」
朝比奈「いやでも受付を通るからな、鶴子さんの監視からは逃げられない。泣き顔をオーナーに見られようものなら、鶴子さんに居残りで三時間は怒鳴りちらされる」
　夏凪、絶句。
朝比奈「こいつ戻して、次の猫」
夏凪「はい……あ。朝比奈先生？」
朝比奈「ん？」
夏凪「次の子、ちょっとナーバスな感じがするんですけど、咬みますか？」
朝比奈「そういうのは先に言う」
夏凪「はい」
朝比奈「オレの場合は、な」

夏凪「はい……」
朝比奈「咬まないから、早く出す」
夏凪「はい」
夏凪、ケージに犬を戻して、隣のケージから猫を出す。点滴のチューブが猫の手首につながっている。
朝比奈、猫の目や口の粘膜をチェックする。
夏凪「こんなに早く来ても、あんなに怒られるなんて……」
朝比奈「怒るのが鶴子さんの趣味なんだろ」
夏凪「看護師さんたち、よく辞めませんね」
朝比奈「辞めたくても辞められないからな」
夏凪「それって……？」
朝比奈「ここの看護師は転職にむかない。元ひきこもり、元ヤンキー、元ネット地下アイドル、バツ四極貧子だくさん。あの四人は訳あって、ここで生き残ってる」
夏凪「ちなみに？」
朝比奈「それ、本気で知りたいか？」
夏凪「……やめときます」
朝比奈「賢明だ。よし、次は……ウサギか。ウサギの保定の仕方は知ってるか？」
夏凪「わかりません」
朝比奈「腹腔内マスで手術した」
夏凪「マス？」
朝比奈「腫瘤のことだ。良性か悪性かは外注検査の結果次第だ。いま、見たいのは腹部の縫合面だ。まずは、バスタオル」
夏凪「はい」
夏凪、バスタオルを持ってくる。朝比奈がバスタオルを受け取り、保定をやって見せる。
朝比奈「狭いかごに入ってるとわかりにくいが、ウサギの脚力は並外れてる。広い草原をキツネから逃げて、同じか、それ以上の速さで走るんだからな。抱きあげるときに暴れられると、自分の脚力で背骨を折るやつがいるから、バスタオルで足ごと全身をくるんでやる。これで蹴りが出せなくなる」

真剣にそれを見ている夏凪。
朝比奈「あとはストレスをかけないように、抱いてやる。いったん落ち着けば、あおむけにしても大丈夫だ。やってみろ」
夏凪「はい！」
夏凪、朝比奈の手本通りに、やってみる。
朝比奈「それでいい」
夏凪「緊張します」
朝比奈「お前が緊張すれば、ウサギも緊張する。こちらが身構えれば、動物も警戒する。注意深く、リラックスしろ」
夏凪「メモ、したいです」
朝比奈「あとでレポートに書くか？」
夏凪「いいですか？」
朝比奈「好きにしろ。ただし、オレと一緒にいるときはメモを取るな。重要だと感じたことは頭と体で覚えろ。両手はつねに使える状態にしておけ」
夏凪「はい……！」

○同・外
クセのある高級外車が停まる。
運転席のドアが開くと、大音量のクラッシク音楽。エンジンを切って、院長の金閣寺が降りてくる。今日もネクタイの柄が動物系で個性的。
金閣寺、鼻歌まじりに病院へ。見事に咲ている花を、ちょん、ちょん、と指でつつきながら。
自動ドアに「診察十時から」の札。

○同・処置室
壁時計が示す時刻は、十時五分前。
社長出勤の金閣寺が白衣をはおりながら現れる。
金閣寺「みなさん、そろってますか？　おはようございます！」
看護師たち、鶴子、朝比奈、「おはようございます」とそれぞれに返す。

夏凪は大きな、あくび。
夏凪「おはようございます……」
金閣寺「朝のミーティングは終わりましたか？」
鶴子「終わりました」
金閣寺「よろしい。今日も一日、がんばりましょう！　夏凪くん。昨日は疲れたでしょう？　今日は朝比奈先生にくっついて、のんびり診察の様子を見学させてもらうといいですよ」
夏凪「はい……」
金閣寺「彼を頼みますよ、朝比奈先生！」
朝比奈「はい」
金閣寺「うんうん。朝比奈先生のような頼れる獣医師がいて、ファミリアは幸せな動物病院ですね。朝比奈先生がいないと、とてもじゃないが、うちは回りませんよ。朝比奈先生は顔もいいし、腕もいい。本当に優秀な獣医師です。彼から多くを学びとってくださいね、夏凪くん！」
金閣寺、夏凪の肩を軽くたたいて、機嫌よく立ち去る。
夏凪「朝比奈先生、めちゃくちゃ院長先生に信頼されてるんですね。ベタ褒めでした」
朝比奈「あれもハラ」
夏凪「ハラ？」
朝比奈「褒めハラ。キミがいないとダメなんだ、的なこと言って、ここに縛りつけるやり方だ。院長と鶴子さん、あの夫婦はアメとムチで、どっちもハラスメント上司」
夏凪「うわぁ」
朝比奈「今日のカルテが山になってる。やるか」
夏凪「はい……」
夏凪、あくびをする。
朝比奈「眠いか？」
夏凪「……はい。正直、今朝からので今日の元気は使い果たしました。睡眠不足も少し。ちょっと、疲れました……」
朝比奈「今日は再診の予約が二十件。手術の

予定が四件だ。入院とホテルが八件。うち、三件が退院。他にも予約なしの診察が入ってくる。もしかしたら、緊急手術もあるかもしれない。昨日の帝王切開みたいにな」

夏凪「死ねる……」

朝比奈「なに？」

夏凪「がんばります！」

朝比奈「診察室では、あいさつ以外に口を開くな。オーナーに話をふられたら、お前は十文字以内で返せ。ムダ話をしているヒマはない。院長が遊んでるあいだに、こっちは数こなすぞ」

夏凪「はぁい……」

夏凪は眠そう。

朝比奈、夏凪の尻にケリを入れる。

夏凪「いだ！」

朝比奈「目を覚ませ、実習生！　薬品棚の右はし下段にカフェイン錠がある。いますぐ三錠、飲んで来い！」

夏凪「は、はい！」

夏凪、尻をさすりながら、あわあわと薬品棚へむかう。

○同・診察室

犬の悲鳴。夏凪、暴れる大型犬を必死で押さえている。診察台の上や壁に血が飛び散っている。

犬のオーナーが脅えている。若いカップル。

朝比奈「そうですね。前足の爪が二本、折れています。割れてると言った方が正確かもしれない。痛い処置になりますが、根元の方で切ります。いいですね？」

オーナー4「は、はい……お願いします！」

朝比奈、犬用の爪切りを持つ。

朝比奈「切ります」

バツン。と爪を切る。

犬の悲鳴。夏凪は暴れる犬を押さえるのに必死。

もう一回、バツン。

犬は悲鳴をあげて飛び上がる。夏凪は犬に頭突きされて、鼻を打つ。
夏凪「いっ！」
朝比奈、短く切った爪に止血剤をぬり込む。これがまた、しみる薬で、犬が騒ぐ。必死で抑える夏凪。
朝比奈「爪の処置は終わりました。しばらくは痛がるかもしれませんが、じきに気にしなくなります。化膿止めに抗生剤を注射しておきます。体重は、３４．６」
リサがドアのところにひかえている。
リサ「抗生剤です」
リサがトレーにのった注射器と抗生剤のバイアルを渡す。
朝比奈「どうも」
朝比奈、注射器とバイアルを受け取り、手慣れた様子で薬液を吸うと、さっと犬に注射する。
朝比奈「終わりです。しばらく様子を見て、快方にむかうようでしたら再診は必要ありません。なにか異変に気づきましたら、早めに受診してください」
オーナー４「あの、そこの爪は……？」
朝比奈「時間をかけて元に戻ります。治れば日常生活に支障はないでしょう」
オーナー４「ありがとうございます！」
朝比奈「お大事に」
夏凪、犬を診察台から降ろす。それがまた、重い。ふんばる。
夏凪「ふ、ん……！」
朝比奈、犬のリードをオーナーに渡す。犬がリードを引っぱり、ドアに激突。バタバタと診察室を出ていく。
朝比奈「実習生」
夏凪「はい」
朝比奈「鼻、大丈夫か？　さっきの頭突き」
夏凪「大丈夫です！　あれくらい、全然！」
夏凪の鼻から、たらぁ、と血が出る。
夏凪「あ」

×　　×　　×

太いヘビを持っている夏凪、からみつかれて青ざめ、硬直している。鼻にティッシュがつまっている。
朝比奈は、聴診器でヘビのおなかの音を聞いている。
心配そうに見ているオーナー5。若い男性。
朝比奈、聴診器を耳からはずす。
朝比奈「下痢、嘔吐、食欲廃絶……この子を部屋に放して遊ばせたりしてますか？」
オーナー5「たまに、してます」
朝比奈「最近だと、いつ？」
オーナー5「ええと、先週の木曜と、おとといも……」
朝比奈「部屋にあるもので、なにか異物をのんだ可能性があります。それが腸につまったのかもしれない。まずはレントゲンで確認しますが、いいですか？」
オーナー5「はい。お願いします！」
硬直したままの夏凪、ヘビにチロチロと顔をなめられている。

×　　×　　×

壁のディスプレイに映し出されたレントゲン画像。それを見ている朝比奈。ヘビの腹部に無数の白い丸が写っている。ときおり短い線もある。
朝比奈「この白い影は明らかに異常なんですが……」
朝比奈、考えている。ヘビはオーナーに巻きついている。夏凪は眠気で倒れそうに舟をこいでいる。
オーナー5「先生、それは悪い影なんでしょうか！　ニシキくんは助かりますか？」
朝比奈、診察室から受付にむかって声をかける。
朝比奈「鶴子さん、五百円玉、持ってきても

らえますか？」
鶴子が来て、朝比奈に硬貨を渡す。
鶴子「はい、先生」
朝比奈、オーナーにむかって、
朝比奈「五百円玉貯金、してますか？」
ハッとするオーナー。
オーナー5「むかし、してました。途中で飽きて、そのままに……」
朝比奈、レントゲン画像に五百円玉をあてると、白い丸と大きさが一致する。
オーナー5「あ」
朝比奈「開腹してみないとわからないことですが、腸につまっているのは、おそらく、五百円玉硬貨かと」
オーナー5「なんで、そんなものを？」
朝比奈「貯金箱を落としたかなにかして、ふたが開いたのでは？　光っていたから食べた。それは本人にしかわからないことですが。硬貨が腸壁を傷つけて腸に穴が開けば、腹膜炎を起こして生死にかかわります。自然に出てこない以上、手術が必要になりますが」
オーナー5「お願いします、先生！」
朝比奈「では、このまま、お預かりします。今日中に手術をして、少なくとも一週間は入院で様子をみます。お見舞いは診察時間内であればいつでもどうぞ。受付に同意書がありますので、必要事項にサインをお願いします」
オーナー5「……ニシキくんは助かりますよね？　また、元気にマウス食べてくれますよね、先生！」
舟をこいでいた夏凪、壁に頭を打ちつける。
夏凪「はい！　はい……はい？」
夏凪を見る、朝比奈とオーナー。二人、夏凪をなかったことにして。
朝比奈「全力を尽くします」
オーナー5「お願いします！」

○同・処置室
時刻は昼の一時を回ったところ。
手術の準備が着々と進む。
歩きながらパックのゼリー飲料を飲む朝比奈。小走りについていく夏凪。
夏凪「これからオペですか？」
朝比奈「昼休みのうちに全件すませる」
夏凪「全部ですか？　昼休み、終わっちゃいますよ！」
朝比奈「だから？」
夏凪「だから？　だから……ボクもエネルギーチャージします！」
朝比奈「さすがに実習生に助手は頼めない。看護師を交代で入れる！」
看護師たちが返事をする。
手術用の青いガウンを着る朝比奈。
朝比奈「まずは猫の去勢から。助手以外の看護師は昼休憩を」
看護師たちが返事をする。スピーディーな現場。夏凪は邪魔にならないようにどいて見ている。
夏凪「そういえば、院長先生は？　鶴子さんは？」
朝比奈「どうでもいい！」
準備が終わって手術室に入る朝比奈。

○一流ホテルのカフェレストラン・店内
ウェイターの所作をみただけで格式の高さがわかる。
金閣寺と鶴子、それぞれ、パフェとかき氷を食べている。
鶴子「んー、つめたぁい！　おいしい！」
金閣寺、笑っている。
金閣寺「氷を削って三千円とは、いい時代になりましたねぇ。水ですよ、それ」
鶴子「メロンものってますぅ。ねぇ、あなた。もっと実習生を入れてよ。タダの労働力、助かるわ。看護師たちも、いつもよりメイク気合い入ってるし、夏凪くんの手前、猫

かぶってて扱いやすいわ」
金閣寺「実習生を入れたいのはやまやまなんですけどねぇ。就活転職のブラック企業スレにうちの名前が載っちゃったから」
鶴子「本当に？」
金閣寺「いまの若い子はそういうの見てるでしょう？　応募が減っちゃって」
鶴子「誰が書き込んだのかしら！　許せない！　面倒みてやったのに！」
金閣寺「夏凪くんは、そういうの、事前にチェックしなかったみたいですね」
鶴子「あの子、ぼんやりしたとこ、あるから。それがかわいいんだけどね？」
金閣寺・鶴子「ねー」
金閣寺「とりあえず、うちの褒めコメントでも入れときましょうか」
鶴子「そうね」
二人、スマートフォンをいじる。

○夏凪家・外観（夜）
明かりがついている。ワイワイとにぎやかな声が聞こえる。
疲れて帰ってくる夏凪。
家の前に立つと、わんわんと犬の鳴き声がする。
夏凪「はい。バレた」
くすっと笑う。

○同・中・玄関（夜）
しっぽをふって迎える白い犬。
夏凪「ただいま、ユキマル」
帰ってきた夏凪、犬をなでて家にあがる。もう疲れすぎて、あがるときにつまずいて、こけそうになる。

○同・リビング（夜）
ローテーブルを囲んで飲み会をしている父と、その同期、サラリーマンのグループ。赤ら顔。
精も魂もつきたような夏凪が入って

くる。
夏凪「ただいまぁ……」
覚「おぅ！　おかえり！　渉！」
覚、夏凪をつかまえて肩を組む。
覚「うちの息子、大学生の！　いま、動物病院で実習してるんだって！」
なぜかそこで爆笑する父、覚。夏凪は眠気と疲れで倒れそうになっている。
おつまみ料理を運ぶ和花子。
和花子「渉、大丈夫？　なんか、日に日に白目なんだけど。お風呂入って、もう寝なさい」
夏凪「うん……ムリ。いま風呂入ったら、溺れる気がする」
覚「どうした、どうした、大学生？　現実社会はそんなにきついか？」
夏凪「きついっていうか……なんていうか……そもそも、オレ、どうして獣医になろうと思ったんだっけ？」
覚「は？　そりゃ、あれだろ。クイズだ、渉」
夏凪「……クイズ？」
覚「動物番組のクイズだろ。ばあちゃんがまだいたころだよな？　お前がそこにいて、ばあちゃんが横にいて、オレが……」
父の声が聞こえなくなっていく。もうろうとしつつ、夏凪は思い出す。

○（回想）同（夜）
テレビで動物番組を見ている高校生の夏凪（17）と祖母、緑（みどり）（82）。
画面に映るオレンジ色の小型のサル。
番組アナウンサーの声「……年12月に、二匹は、はじめてブラジルから日本の動物園にやってきました。きれいな金色の毛並み、ライオンのようなたてがみが特徴の小さなおサルさんです」
夏凪「ゴールデンライオンタマリン」
緑「ん？」
夏凪「このサルの名前だよ。ゴールデンライ

オンタマリン」
番組アナウンサーの声「メスがおっぱいをあげると双子の赤ちゃんたちはオスのもとへ。オスが子守をするのがこのおサルさんの特徴なんです」
緑「は？　なに？」
夏凪「ゴールデンライオンタマリン」
緑「は？」
番組アナウンサーの声「ここで、クイズでキュン！　ブラジルの熱帯雨林に住む、このおサルさんの名前は？」
夏凪「だから、ゴールデンライオンタマリンだってば！」
緑「あぁ」
夏凪「あぁ、って。リアクション、うす！」
　笑ってしまう夏凪と緑。
番組アナウンサーの声「正解は、ゴールデンライオンタマリン！　みなさん、覚えられましたかぁ？」
夏凪「ね？　でしょ？」
緑「渉。あんたは獣医になりなさい」
夏凪「え。なに、急に。なんで？」
緑「こんな、どうでもいいこと覚えてるのは動物が好きだからじゃないの？　まだ進路、決めてないんでしょ？　好きなことを仕事にできるのは、本当に幸せなことなんだよ。あんたは獣医になりなさい！」
夏凪「ばあちゃん。オレの人生、ゴールデンライオンタマリンで決めていいの？」
緑「あたしは運命を感じたよ」
夏凪「運命？　運命って、そんなもん？」
緑「そんなもんだね」
夏凪「地味だなぁ……」
　夏凪、視線をずらすと、ソファで夏凪の隣に猫が眠っている。おなかを出して、油断したポーズ。夏凪、そのふかふかのおなかをなでる。猫の耳がピピンと動き、寝返りを打つ。
夏凪「……獣医かぁ」

○もとの同（夜）
酔っぱらった覚に肩を組まれている夏凪。
夏凪「あれは、動物が好きとか、運命がどうとか、そういうんじゃなくて。ただ、オレがテレビの観すぎで、たまたま知ってたってだけで……」
覚「わかるよ、渉。父さんは電車の運転手さんになりたかったんだ。白い手袋で、出発進行！　ってな。もっと言うと、毎日ただで新幹線に乗りたかったんだ。でも、就職で内定が取れた会社がいまの……」
和花子が父から夏凪を引きはがす。
和花子「いいから、渉はもう部屋に行きなさい。寝て。本当に死にそうな顔してるわよ」
父の一人演説は続いている。「夢を見るのは若者の特権」とかなんとか言っている。仲間のサラリーマンたちは他の話題で盛り上がっている。
夏凪「……うん。もう限界。おやすみ……」
夏凪、その場でソファに崩れ落ちる。
覚「わぉ！」

○「ファミリア動物病院」・外（早朝）
夏凪、目の下のクマがひどい。頭もぼさぼさ。毎日の日課、しゃがんで花の手入れをする朝比奈と夏凪。
朝比奈「生きてるか、実習生」
夏凪「……なんとか」
朝比奈「六単位は致命傷になりかねないぞ」
夏凪「……がんばります」
朝比奈「今日が終わったら、明日は半日。それで一週間の地獄の実習も終わりだ。そしたら、残りの大学生活を存分に楽しめ。卒業すれば、またこの地獄に舞い戻るんだからな」
夏凪「……はい」
朝比奈「目がヤバいな」
夏凪「……ありがとうございます」
朝比奈「まぁ、いいか」

夏凪「朝比奈先生は、どうして獣医になったんですか？」
朝比奈「あ？」
夏凪「オレ、わかんなくなっちゃって。本当に獣医になりたいのか。受験のとき、ノリで進路、決めちゃった感じだったんで」
朝比奈「ノリで獣医学部は受からないだろ」
夏凪「運がよかったんです……いや、悪かったのかな？　どっちだろ？　わかんない」
朝比奈「動物病院がすべてブラックなわけじゃない。あくまで『ファミリア』が真っ黒なだけだ。オレが独立したら、オレのところは労働環境を整えるつもりだ。もちろん、ケガをしたときには労災もおりるように……」
　朝比奈の肩に夏凪がよりかかる。
　朝比奈、見ると、夏凪は居眠りしている。
朝比奈「……実習生」
　朝比奈、さっとよける。
　夏凪、地面に倒れた衝撃で、
夏凪「いだ！」
　目を覚ます。

○同・診察室
　犬が吠えている。変な鳴き声。
　診察をしている朝比奈。補助に入っている夏凪。オーナーは三人家族で、なにやら深刻な雰囲気。中年男性は苦い顔をしている。中年女性は泣いている。娘は、きっぱりとしている。
　診察台の上に老犬がいる。ボケていて、鳴き続ける。
朝比奈「いいんですね、本当に」
　オーナーの娘が毅然と答える。
オーナー6「はい。お願いします」
朝比奈「この注射を打てば、麻酔が深くかかります。そのまま呼吸が止まって、死に至ります。本当に、安楽死をご希望なんですね？」

オーナー6「はい。家族全員で決めたことです」
夏凪、うつむいている。
朝比奈「わかりました。夏凪くん、腕の静脈を確保する。保定を」
注射を準備する朝比奈。
犬は吠えている。遠吠えのような、誰かを呼ぶような。
夏凪「……どうして、安楽死なんですか？」
朝比奈がハッとする。
夏凪「鳴いてうるさいからですか？　自分で立てなくなって汚いからですか？　歳をとって、ボケちゃって、むかしと違うからですか？　もうかわいくないってことですか？」
ムッとする娘。激しく泣く中年女性。
夏凪「この子は、もう老犬ですよね？　このままでも、そんなに長生きするとは思えません。なにも、わざわざ殺さなくても！」
朝比奈「夏凪くん、タオルを持ってきてくれるかな！」
朝比奈が割って入る。
夏凪「かわいそうじゃないですか、そんなの！　この子はまだ生きてる。なのに、注射一本で全部、終わりにするなんて！　一緒にすごした思い出もみんな、捨てちゃうんですか？」
涙をためる夏凪。
朝比奈「すみません、彼のことは気にしないでください。まだ学生で、なにもわかってないんです」
朝比奈に診察室から追い出される夏凪。朝比奈、ドアのところにひかえているミクに小声で指示する。
朝比奈「実習生をスタッフルームで寝かせろ。過労と睡眠不足で頭がおかしくなってる」
ミク「はい」
泣いている夏凪を連れていくミク。
それを見送る朝比奈。ため息をつき、診察に戻る。

朝比奈「安楽死の処置をはじめます」
家族が見守る中、ヒナが補助に入り、
朝比奈が犬の腕の血管に注射を打つ。
やがて、犬は鳴きやみ、力なく台に横
たわる。
朝比奈が聴診器で心音を確認する。
朝比奈「……以上です」
さっきまで毅然としていた娘が泣き
崩れる。
それを黙って見ている朝比奈。

○同・外・裏
まとめてあるダンボールの束を蹴る
朝比奈。
朝比奈「あとで泣くぐらいなら、やらせるん
じゃねぇ！」
乱暴に頭をかきむしる。
朝比奈「あぁ……！」
朝比奈、ハッとしてふりむく。
後ろに夏凪が立っている。
朝比奈「実習生……」
夏凪「目が覚めました」
朝比奈「そうか」
夏凪「夢を、見ました」
朝比奈「は？」
夏凪「むかし……っていっても、高校生のと
きなんですけど。うちで飼ってた猫が交通
事故に遭ったんです。家の前で」
朝比奈「……」
夏凪「あのとき、ここに連れてきて、院長先
生がすぐ手術だってなって……オレ、なに
もできなくて、待ってるあいだ、泣くだけ
でした。待合室で、めちゃくちゃ泣いてま
した。高校生男子が、ですよ？」
朝比奈「不気味だな」
夏凪「あのとき、誰かがオレに言ったんです。
泣くな、って」
朝比奈「？」
夏凪「助けたければ、獣医になれ、って」
二人、少し黙る。

夏凪「院長先生じゃないです。手術中でしたし。待合室にはオレしかいなかったはずです。父は仕事で、母は外でおばあちゃんに電話してました。あの声が誰だったのか、思い出せないんです……でも、あのひとことで、オレ、獣医になろうって」
朝比奈「……そうか」
夏凪「変な話で、すいません。やっぱり、気にしないでください」
朝比奈「わかった。無視する」
夏凪「さっきは、すいませんでした。診察中に口出しして」
朝比奈「あぁ。二度とやるな」
夏凪「はい」
朝比奈「でも、お前は正しかった」
夏凪「え？」
朝比奈「さっきの感情を忘れるな。一生、なくすな。お前は最後まで命にしがみつけ」
夏凪、朝比奈の気持ちを感じる。
夏凪「……朝比奈先生は、安楽死、断らないんですね」
朝比奈「この病院の処置に『安楽死』の項目がある以上、オレはやる。雇われだからな」
夏凪「つらいですね」
朝比奈「別に。それが院長の方針なら従うだけだ。ファミリアにはファミリアのやり方がある。場合によっては、安楽死が動物を救うことだってあるしな……気にするな。オレは鈍感だ。お前みたいに感じやすくない。たいていのことは平気だし、そもそも気づかない方だ。まぁ、さすがに、真後ろに誰かいれば気づくだろうけどな」
と言っている朝比奈の真後ろに金閣寺が立っている。
夏凪「あ」
金閣寺「二人とも。昼休みは終わりましたよ？」
ギョッとしてふりむく朝比奈。
苦笑いする夏凪。
金閣寺「夏凪くん、明日の午後は実習おつか

れさまの打ち上げをしましょう！」
夏凪「え、あ、はい」
金閣寺「バーベキューの用意をしておきますから、お楽しみに！」
夏凪「あ、ありがとうございます……」
夏凪は、それより寝たい。朝比奈が耳打ちする。
朝比奈「寝落ちして焼き網に倒れ込むなよ」
夏凪「は、はは……気をつけます」
金閣寺「まぁ、まぁまぁまぁ。世の中、色々あるとは思いますが、けっこう毛だらけ、猫ハイだらけ、獣医はステキなことだらけ！　ということで、さぁ！　実習に戻って。最後まで楽しくいきましょう！」
なんだか微妙な気がするが、夏凪はあらためて思いを固める。
夏凪「はい！」

○同・外（夜）
夜でも咲いている花たち。
「おつかれさまでした」と声をかけ合って帰っていく看護師たち。
夏凪も病院から出てくる。
夏凪「はぁ。やっと終わったよぉ。一日が長いよぉ。あと半日か……おつかれさまでしたぁ！」
金閣寺と鶴子も出てくる。
金閣寺「おつかれさま、夏凪くん」
鶴子「おつかれさま」
夏凪「おつかれさまです。朝比奈先生は今日も泊まりですか？」
金閣寺「そうみたいですね。今夜は緊急の連絡が入らないといいんですが。いったい、彼はいつ寝てるんですかね？　まったく超人的ですよ、朝比奈先生は。夏凪くんも、朝比奈先生をお手本にしましょうね！」
金閣寺と鶴子が笑う。夏凪、ひきつった笑いで同調しておく。
夏凪「……そう、します。はい」

○住宅地・道路（夜）
夜の静かな住宅地。ほかに人のいない道路の真ん中、夏凪は月の下を歩く。

○（回想）夏凪家・リビング（夜）
それは真冬のこと。
父、覚（48）が酔って帰ってくる。
覚「渉！　渉、父さんが帰ったぞ！　クリスマスの聖なる夜に、父、覚、恥ずかしながら帰ってまいりましたぁ！」
なぜか大笑いしている覚。
祖母と一緒にテレビを見ていた高校生の夏凪は、しらっとしている。
夏凪「見りゃわかるよ。おかえり」
覚「いいや、わかってない！」
夏凪「なにが」
覚「庭を見ろ！」
夏凪「なんで」
覚「いいから、見ろ！」
覚がカーテンを開け、サッシ窓を開ける。粉雪が舞い込む。
夏凪「ちょ、寒いから……」
夏凪、言いかけて、目を見開く。
雪が降る白い庭に、新しい犬小屋と、それにつながれた白い子犬がいる。
夏凪「……犬」
和花子（45）がキッチンから飛び出してくる。
和花子「ちょ！　ダメじゃない、パパ！」
覚「いいだろ、犬くらい飼ったって。猫が死んでから、渉も死んだみたいじゃないか。だから、子犬でも買ってやってだぁね？」
和花子「だから！　あんなちっちゃい子を外につないでおいちゃダメだって言ってんのよ！　しばらくは家の中で大切に育てないと、寒くて凍ったらどうすんのよ！」
夏凪、なにかに導かれるように、裸足のまま庭に出ていく。

○（回想）同・庭（夜）
粉雪が舞う中、子犬が見上げる。
夏凪、しゃがんで、子犬を抱き上げる。
子犬がしっぽをふって夏凪の頬をなめる。白い毛並みに、ピンクの舌。
夏凪「あ、わ、こら……」
子犬は夏凪の頬をなめ続ける。
夏凪「……あったかい……」
夏凪の目に涙がうかぶ。
夏凪「そっか……そうだよな」
涙がぽろぽろとこぼれ落ちる。
夏凪「生き物だもんな……」
涙がとまらない。
夏凪「うん。わかった。わかったよ。お前の名前を決めないとな」
夏凪の涙を子犬がなめとる。

○夏凪家・外観（夜）
夜空を見上げている夏凪。
夏凪「あのときの子犬も、もう三歳なんだよな。あんなに小さかったのに、けっこうでかくなったよな……三歳か」
月がきれいだ。
夏凪「まだ……三歳なのに……！」
愛犬は心臓病を患っている。
月がにじむ。
夏凪、涙ぐんだ目元をぬぐって家に入ろうとする。
夏凪「……ん？」
ふと、気づく。
静かだ。
夏凪「ユキマルが、鳴かない……？」
夏凪、ハッとして、家に入る。

○同・中・玄関（夜）
夏凪が戻る。
いつもの場所に犬のベッドがない。
夏凪「……ユキマル？　母さん！　父さん！」
家にかけあがる夏凪。

○同・リビング（夜）
部屋にかけこむ夏凪。
犬のベッドはリビングにある。白い犬が発作を起こしている。それを心配そうに見守っている和花子と覚。
和花子「渉……！」
夏凪「ユキマル！」
犬にかけよる夏凪。
呼吸が苦しそうだ。犬は手足をばたつかせている。
夏凪「なんで！　どうして、病院に連れてかないんだよ！　いますぐ……！」
和花子「ダメ！　動かさないで！　ユキマルが苦しむから！」
夏凪「でも、このままにしておけないだろ！」
覚「渉……ユキマルを見送ってやろう」
夏凪「は？　なに言ってんだよ！」
和花子「ユキマルは心臓病なのよ！　治らないの！　もう、元気だったころには戻れないの……！」
夏凪「わかってる！　わかってるけど……このまま、ユキマルが死ぬまで眺めてるなんて、できるわけないだろ！　行こう、ユキマル！」
夏凪、白い犬を抱き上げて、部屋を出ていく。
和花子「渉！」
覚「母さん！」
夏凪を追いかけようとする和花子を覚がとめる。
覚「ユキマルは渉の犬なんだ。渉に任せよう」
和花子「……！」
泣き出す和花子の肩を、覚が強く抱きよせる。

○「ファミリア動物病院」・受付（夜）
暗い院内で電話が鳴る。しばらく呼び出したあとで、音声が流れる。
音声「緊急ダイヤルに転送しています。そのまま切らずに、お待ちください。緊急ダイ

ヤルに転送しています……」
どこからか、スマートフォンが鳴る。

○同・手術室（夜）
暗い中、寝袋で寝ていた朝比奈が起きあがる。
スマートフォンを取り、電話にでる。
朝比奈「はい。ファミリア動物病院……実習生？　お前、寝とかないと明日……」
受付の方でドアを叩く音がする。
そっちを見る朝比奈。
朝比奈「……わかった。いま、開ける！」

×　×　×

明かりがついた手術室。発作を起こしている白い犬に、朝比奈が酸素を送り込むため気管チューブを挿管する。
朝比奈「気管チューブ！」
夏凪「はい！」
朝比奈「挿管する！」
夏凪「はい！」
朝比奈が処置し、夏凪が補助に入る。
二人とも私服で、青いガウンは着ていない。
朝比奈「気道を確保した。酸素、あげろ！」
夏凪「はい！」
呼吸器のダイヤルをまわす夏凪。
朝比奈「心電図！　電極をつけろ、三点誘導！」
夏凪「はい！」
夏凪、心電図を取るためのクリップを犬につけ、アルコールで濡らす。
朝比奈「……聞こえるか、この音」
夏凪、犬に耳を近づける。
体内でごぼごぼと音がしている。
夏凪「泡立つような、音が……」
朝比奈「肺水腫を起こしている。肺に水がたまって、溺れてるのと同じ状態だ。酸素を

入れても呼吸ができない。肺の水を抜く！
静注で利尿剤を入れるぞ！」
夏凪「持ってきます！」
夏凪、薬品棚の前に立って、利尿剤を探す。薬はずらりと何種類もある。指が迷う。簡単に探し出せない。
朝比奈が薬品棚の引き出しをあけて、利尿剤を取る。
夏凪「あ」
朝比奈「保定！」
夏凪「はい！」
朝比奈、利尿剤を注射器に吸って、夏凪が支える犬の腕に注射する。
朝比奈「止血」
夏凪「はい！」
夏凪、犬の腕を持って注射したところを止血しながら、犬を横たえる。
朝比奈「実習生、気管チューブを見ろ」
気管チューブに犬の体内から泡が逆流している。
朝比奈「最悪の状況だ……こうなったら助けられるかどうか……処置が間に合うか、心臓が止まるのが先か、だ」
夏凪「あ……あぁ……！」
朝比奈「動揺するな！　しっかりしろ！」
夏凪「は、はい！」
朝比奈、聴診器で犬の胸の音を聞く。
朝比奈「……マズい、心臓が細動を起こしてる！　離れろ、実習生！」
夏凪が離れる。
朝比奈、除細動器を用意して、チャージ、犬に電気ショックを与える。
犬の体がビクンとはねる。
びくっとする夏凪。
夏凪「ユキマル……！」
朝比奈「心臓マッサージをする。深さとリズムを覚えろ、実習生！」
朝比奈が犬に心臓マッサージをする。
夏凪「覚えました！」
心電図の波形は乱れたまま。

朝比奈「代われ！」
夏凪が心臓マッサージを続ける。
朝比奈は電気ショックの準備をする。
除細動器のチャージがすむと、
朝比奈「離れろ！」
夏凪が離れると、朝比奈が犬に電気ショックを与える。
夏凪と朝比奈、心電図の波形を見る。
波形は乱れたまま。
朝比奈「心マ、続けろ！」
夏凪「はい！」
夏凪、額に汗をうかべながら心臓マッサージを続ける。
二人は電気ショックと心臓マッサージをくり返す。電気ショックをするたびに心電図の波形は飛びあがり、再び乱れる。その波形は次第に平たんになっていく。
朝比奈「……戻れ、戻れ……！」
夏凪「戻れ！　ユキマル！」
もう一度、電気ショック。
心電図に一瞬だけ、正常な波形が現れる。
夏凪「ユキマル！　ユキマル、聞こえるか、オレだ。しっかりしろ、帰って来い。がんばれ！　散歩に行くって約束したろ！」
心電図が乱れる。それは直線に近くなり、細かく波打っている。
さっきからずっと、アラームが鳴り続けている。
朝比奈、スイッチを押してアラームをとめる。
ハッとする夏凪。
夏凪「朝比奈先生！　蘇生してください！　ユキマルを生き返らせてください！」
朝比奈「実習生……」
夏凪「お願いします！　まだ、散歩に行ってないんです！　約束したのに……約束、したのに！」
朝比奈「聞け！　実習生！」

夏凪「！」
朝比奈「冷静になれ。これから獣医になる人間として、考えて、答えを出せ。これ以上、やり続けるのが正しいかどうか」
夏凪「それって……」
朝比奈「自発呼吸は止まってる。酸素を送り込んでも肺の中は水であふれてる。心臓は限界だ、もうすぐ心停止になる。ここで蘇生したとして……もし生き返ったとしても、ユキマルは心臓病の末期だ。また苦しんで死ぬことに変わりはない。決めろ、お前の意思で決めるんだ、夏凪！」
夏凪「……ムリです、選べません！　そんなの、選べるわけないじゃないですか！」
朝比奈「時間をやる。三分だ。それ以上、ユキマルの時間をムダにするな」
夏凪「……！」
夏凪、犬を見る。
横たわっている白い犬。

○同・待合室（夜）
暗い待合室。
月明かりが静かに照らす。
ソファに座って、顔をおおって泣いている夏凪。
夏凪「ユキマル……ユキマル。どうしたらいいんだよ……まだあたたかいのに、さっきまで息だってしてたのに、心臓だって動いてたのに……死なせるなんて、ムリだよ。決められない。オレにはできない……！」
誰かが隣に座る気配。
ハッとする夏凪。
夏凪、隣を見る。
月明かりを受けて、隣に誰か、知らない子どもが座っている。
誰か「もう、いいよ」
夏凪「……」
誰か「もう、いいんだよ」
夏凪「……誰？」
誰か「楽しかったから。もう、十分。キミに

は少しの時間だったかもしれないけど、ボクにとっては長い時間だったんだよ。最後に会えてよかった。一緒にいられて、よかった。キミに、小さいころみたいに抱っこしてもらえて、うれしかったよ。ありがとう。たくさん、なでてくれて」

夏凪、言葉が出ない。

誰か「きれいな名前を、ありがとう」

夏凪「……」

誰か「キミがボクにしてくれた全部。最後まで、好きでいてくれたこと、全部、全部、ありがとう」

夏凪「……待って」

誰か「さようなら」

子どもが立ち上がる。

夏凪「行くな」

誰か「いつか、どこかで。またね」

手をのばす夏凪。

夏凪「ユキマル！」

待合室に響く声。

そこには夏凪のほかに誰もいない。

夏凪「……」

現実かどうかわからない。

夏凪はハッとして、手術室に戻る。

○同・手術室（夜）

心電図のアラームが鳴っている。

朝比奈が電気ショックを与えるが、波形は戻ってこない。

朝比奈「戻れ！　戻れ！」

夏凪「……！」

夏凪、涙があふれる。

朝比奈「行くな、戻って来い、ユキマル！」

夏凪「……もう、いいです」

夏凪からほろりとこぼれた言葉。

朝比奈、ハッとして夏凪を見る。

夏凪「ユキマルは、もう、十分、がんばりました」

朝比奈「それが答えか」

夏凪「はい」

心電図の波形が、一本のまっすぐな線になる。

朝比奈「聴覚は一番、最後まで生きてる。声をかけてやれ。聞こえてるかもしれない」

夏凪、犬に近づき、耳もとで話す。

夏凪「よくがんばったな、ユキマル。ありがとうはオレの方だよ。お前がいなかったら、オレは受験に失敗してた」

朝比奈「なんだそれ」

夏凪「ユキマルがオレをロスから救ってくれたんです。オレが受験勉強に集中できて、獣医学部に合格できたのは、ユキマルのおかげなんです」

朝比奈「……そうか」

夏凪「さようなら。ユキマル。いつかまた、どこかで！」

夏凪、もう動かない白い犬をなでて、その目を閉じてやる。

涙をこらえきれない。我慢しようとしても、どうしてもあふれる。

それを見ている朝比奈。

夏凪、泣き崩れる。

○同・外（夜）

きれいに咲いている夏の花。

それをつむ、朝比奈と夏凪。

夏凪「いま、思ったんですけど。あのとき聞いた声も、もしかしたら動物の声だったのかもしれない……」

朝比奈「ん？」

夏凪「うちで飼ってた猫です。あいつが別れ際に、オレに言ったのかもしれない。獣医になれって……」

くすっと笑う夏凪。

夏凪「やっぱり、変ですよね、そんなの。ありえない」

朝比奈「いや。ありうる」

夏凪「え？」

朝比奈「確かに聞いたんだろ？　お前は」

夏凪「信じるんですか？」

朝比奈「オレは宇宙人を信じる」
夏凪「そのレベルで」
朝比奈「それ以上のレベルで。お前が『聞こえた』と言うなら、オレは信じる」
夏凪「……朝比奈先生」
朝比奈「最後の最後まで諦めなかったヤツにしかわからないことだって、あるはずだ」
夏凪「オレ……オレ、もっと、ちゃんと勉強して、いい獣医になります！」
朝比奈「それをオレに言ってどうする。そういうのは、お前が将来みることになる、すべての動物たち、ひとつひとつの命に誓え」
夏凪「……はい！」

○同・手術室（夜）
手術台の上で、きれいにされた白い犬が花にかこまれて横たわっている。
夏凪の声「約束します。ユキマルにも」
犬は安らかに死んでいる。

○公園・バーベキュー広場
ベイサイドの公園からは東京湾と東京らしいビル群が見える。
真っ青な空に入道雲。
一同の声「乾杯！」
「ファミリア動物病院」のスタッフ一同がバーベキューをしている。みなが缶ビールかかげ、一口目をあおる。夏のビールは最高。誰もがいい顔になる。
金閣寺「さぁ！　どんどん焼いて、どんどん食べてください！　遠慮はいりませんよ、みなさんの夏のボーナスは今日のお肉ですから！」
一瞬、ときが止まり、シーンとする。
鶴子「さすが院長先生、太っ腹！」
時間が動き出し、一同は何事もなかったように、わいわいとバーベキューを楽しむ。
缶ビールを片手に、案の定、眠さに負

けてぐらぐらしている夏凪。
その横で朝比奈が大きな肉を食べている。
朝比奈「実習生」
夏凪「……はい？」
朝比奈「パピーウォーカーって知ってるか？」
夏凪「パピーウォーカー？」
朝比奈「盲導犬の育成で、訓練がはじまる歳になるまで、子犬を飼うボランティアのことだ。目的は犬に、人を好きになってもらうこと。そのために、たくさん愛情をかけて育ててやる。それがパピーウォーカーの役目だ」
夏凪「そういえば、むかし、動物番組で見たことがある気がします……ばあちゃんと一緒に」
朝比奈「パピーウォーカーになるには盲導犬協会の審査がある。興味があったらググれ」
夏凪「あの、朝比奈先生」
朝比奈のスマートフォンが鳴る。
たのしくやっていた一同がぴたっと静まる。また、ときが止まった。
みな、朝比奈に注目している。
朝比奈が電話に出る。
朝比奈「はい。ファミリア動物病院です……はい。少々お待ちください」
朝比奈、電話を保留にする。
朝比奈「院長」
金閣寺「ボクはいないってことで」
鶴子「用件は？」
朝比奈「就活中の獣医師が病院を見学したいそうです。三九歳、ブランク十年、男です」
鶴子「釣れた！」
金閣寺「はい、採用！」
電話に出る朝比奈。
朝比奈「明日、朝九時に病院でお待ちしています。詳細はのちほど。では」
通話終了。スマートフォンをしまう朝比奈。
ほっとした一同は、バーベキューを

続ける。
夏凪「その人、続くといいですね」
朝比奈「期待できないな」
夏凪「まだ会ってもないのに」
朝比奈「ファミリアで続く獣医はそうそういないしな。時間外に電話してる時点でセンスもない」
夏凪「きびしい」
朝比奈「お前も肉を食え、実習生」
夏凪「さっきの話、パピーウォーカーのこと。両親に勧めてみます。このぶんだと、うちの両親がロスになっちゃいそうなんで。高級マッサージチェアより親孝行になると思いますし」
朝比奈「マッサージチェア？」
肉にかじりつく夏凪。
夏凪「うま！　この肉、おいしいですね！」
朝比奈「味わって食えよ。労働者の血と汗と涙がつまった夏のボーナスだからな。死ぬほど食っとけ」
夏凪、口元をふき、姿勢を正す。
夏凪「朝比奈先生！」
朝比奈「ん？」
夏凪「院長先生！　鶴子さん！　リサさん、ミクさん、マイさん、ヒナさん！　みなさん！　あらためて、一週間、お世話になりました！　臨床実習、ありがとうございました！」
夏凪、みなにむかって大きくお辞儀をする。
一同、ぽかんとするが、金閣寺が力強く拍手する。それにつられて、朝比奈以外のみなが拍手する。最後の一人になったのを見て、朝比奈も少しだけ拍手。
夏凪、最高の笑顔をみせる。
夏凪「卒業後も、よろしくお願いします！」

（了）